Title	高橋義文氏による「ニーバーの宗教改革論 ： ニーバー『人間の運命』第7章「近代文化における人間の運命をめぐる論争 ： 宗教改革」に学ぶ」報告（科学研究費補助金「ラインホールド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」第 1 回研究会）
Author(s)	鈴木，幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 31-32
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4955
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

科学研究費補助金「ラインホールド･ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」第１回研究会

髙橋義文氏による「ニーバーの宗教改革論―ニーバー『人間の運命』第７章「近代文化における人間の運命をめぐる論争―宗教改革」に学ぶ―」報告

研究会風景

2013年11月11日（月）聖学院本部新館２階会議室において、2013年度第１回目「ラインホールド･ニーバー」研究会が開催された。この研究会は日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究（B）「ラインホールド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」（課題番号：23320025、研究代表：髙橋義文）の助成で開催され、総合研究所のラインホールド・ニーバー研究会との共催で行われた。聖学院大学大学院教授、髙橋義文氏より「ニーバーの宗教改革論」と題して、翻訳中のニーバーの主著『人間の運命』から、第７章「近代文化における人間の運命をめぐる論争―宗教改革」についてご報告いただいた。参加者は18名であった。以下に概要を記す。

第７章は「人間の運命」をめぐる論争を、「宗教改革」から考察した章である。ニーバーによると、贖われた人の生にも罪がつきまとうという事実を、キリスト者の良心が初めて気づいた歴史的な場が宗教改革であるという。また、内在する力としての恵みと外からの力としての恵みについての聖書的な逆説を、宗教改革が破壊しがちであった点を批判している。そこで、ニーバーの理解とは異なるルターとカルヴァンの宗教改革理解について、ニーバーはそれぞれの評価できる点と問題点を展開することで、講論を深めていく。

ルター思想については、恵みの逆説を捉え、アガペーの自由・恵みの優位性を強調した点を評価する。問題点としては、静寂主義に陥る傾向や、聖化の思想に基づいた恵みの分析、敗北主義に終わる社会・文化論、そして社会倫理の分野における相対的正義達成のための一貫した基準がない点を挙げて考察している。

一方、カルヴァン思想に関しては、キリスト者に残る罪や、律法の概念に一貫性があることを評価している。問題点としては、カルヴァンの宗教思想が新しい道徳主義と律法主義の危機に陥る点や、罪概念を問題にしている点、欠如している愛の概念の深みと憐れみ、律法主義になりがちで、反啓蒙主義に陥りやすい律法の理解と聖書主義について考察している。

ニーバーは、宗教改革がルネサンスに敗北したと考えるが、その一因は、ルターの敗北主義とカルヴァンの反啓蒙主義的傾向にあるという。そこで求められるのが、宗教改革とルネサンスの新しい総合であり、キリスト教の歴史解釈の最終的な鍵といえるキリスト教の贖罪論が重要になるという。

以上、第７章を解説した上で、宗教改革が取り組んだ課題の難しさと、ニーバーの理解はエルンスト・トレルチに影響を受けていると考えざるを得ない点、そして第７章はニーバーの宗教改革論の一部に過ぎないことが、髙橋氏により考察された。

発表後の質疑応答では、H. リチャード･ニーバーのいう５つの類型から考えると、ラインホールドは、『人間の運命』にかぎれば４つ目の「矛盾におけるキリストと文化」に当てはまること、また宗教改革がルネサンスに敗北した意味や、第６章で扱われているルネサンスの勝利について、啓蒙主

義をルネサンスに入れることができるかどうか、17世紀イングランドの評価についてといった議論が活発に交わされた。

発題者：髙橋義文教授

（文責：鈴木　幸［すずき・みゆき］聖学院大学基礎総合教育部ポストドクター）